

⑤ さつまの神様 白土松吉翁

那珂市歴史民俗資料館



白土松吉翁顕彰碑は、那珂市役所と一の関親水公園の間を走る道路沿いにあります。昭和31年(1956)11月に、白土松吉翁黄綬褒章記念顕彰会によって建てられました。撰文は県立水戸農業高等学校教諭の森戸達雄、篆額は大内竹之助です。

翁は、現在のひたちなか市三反田に生まれ、明治37年(1904)春、県立水戸農業学校を卒業した後、県立農事試験場に勤めました。生来の研究心と旺盛な実践力が注目を浴び、請われて那珂郡農会に転じ、技師として指導力を発揮して郡農業の振興に大きく貢献しました。もともと那珂郡は畑作地帯であり、しばしば干害に苦しんでいましたが、明治42年(1909)翁はこれを救うにはさつまいもの栽培がもっとも良いと着目し、増収栽培の研究に専念し、ついに反当千貫収穫の「白土式甘藷栽培方法」を案出し、その収穫量はそれまでの3倍以上にいたりました。昭和17年(1942)には農林大臣邸で開催された甘藷増産懇談会に招かれ、大戦下の食糧増産に寄与しました。それ以来「さつまの神様」「甘藷先生」として翁の名声は全国に広まりました。

また、これより先の大正7年(1918)には甘藷の加工に着手し、茨城県をして「甘藷蒸切干」(干しイモ)の特産地たらしめました。

一方、小場江用水路の改修を企画し、日夜数百カ所での講演会・座談会を開催して必要性を力説、一部反対者の深刻な妨害にも屈することなく、前後3年間、幾多の困難を排してついに大正12年度に竣工、那珂川沿岸1000ヘクタール余を干害から救いました。さらには、質量ともに優れたビール麦栽培の改良にも成功しています。

翁が生涯をかけて尽力した農業振興の偉業は、本県農業史上に燦然と輝くものであり、高松宮殿下や県知事の表彰を受け、昭和30年(1955)11月には黄綬褒章の榮譽に浴しました。名利に淡泊、飾らずに素朴で飄々とした性格は人々の敬慕心服するところでした。

昭和20年(1945)、指導を受けてきた農業関係有志は、翁のために那珂市戸崎に甘藷研究所を建設したことにより、そこで自ら栽培に従事し、晩年まで研究に精進していましたが、昭和31年(1956)に74歳で病没しました。

農業後継者問題や遊休農耕地の活用法、地産地消、特産品の開発などさまざまな課題を抱えている今日の農業、翁の歩みと情熱に学びたいところです。